

検討の目的

Society 5.0の実現やグローバル展開に向けたICT技術戦略を推進するため、次期科学技術基本計画や国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）の次期中長期計画等を見据えつつ、ICT分野で国が重点的に取り組むべき技術課題や社会実装方策等について検討を行う

検討項目・論点

- **近年の社会情勢やニーズを踏まえ、国として取り組むべきICT分野の研究開発課題**
 - ・ 進展が著しい技術（AI、脳情報、量子暗号、B5G等）を含めた重点領域の特定
 - ・ 産学官の役割分担を踏まえ国として取り組むべき研究開発分野・課題



重点領域ワーキンググループ

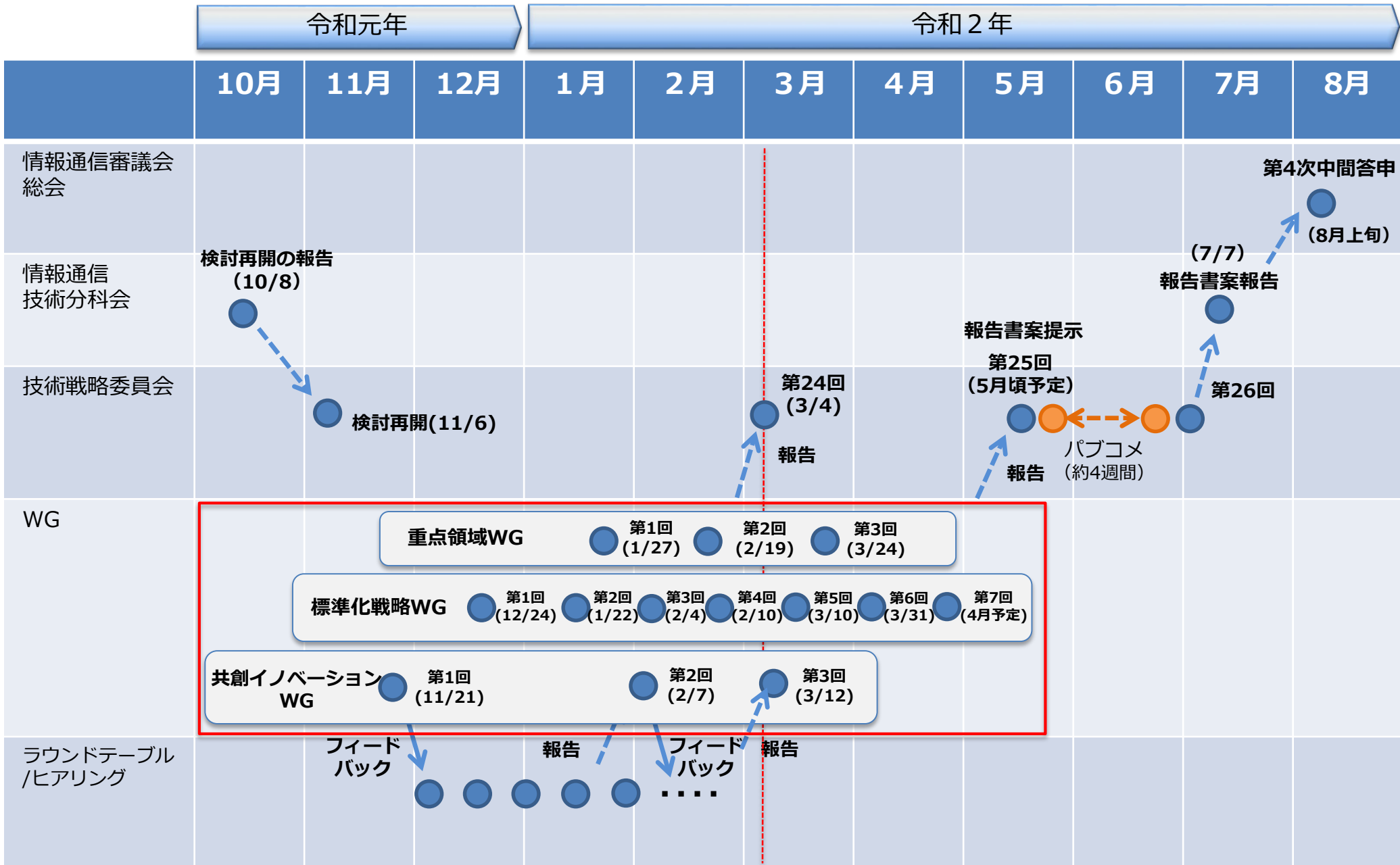
- **技術成果の社会実装方策及びオープンイノベーションに対応した研究開発の環境整備等**
 - ・ 社会実装の推進方策、産学連携及びオープンイノベーション体制の在り方
 - ・ 研究開発による社会課題解決に向けた貢献方策
 - ・ 産学連携及びオープンイノベーションに資する研究拠点の在り方
 - ・ 競争的資金を含めた国の研究開発プログラムの在り方



共創イノベーションワーキンググループ

標準化戦略ワーキンググループ

スケジュール



前回(第23回)における主な意見①

議論の進め方について

- ◆ 世の中の変化が大きい中、研究開発の領域の議論に行く前に、将来社会像を考えるプロセスがあった方がよい。

研究成果の社会還元が求められる中で、技術シーズを社会実装するオープンイノベーションの手法はどうあるべきか

- ◆ オープンイノベーションに取り組む中、外国の研究機関とどのタイミングでタイアップするか考えるべき。
- ◆ 社会実装については、国内だけでなく世界のどこで行うのかを早い時点から考えていくことが必要。
- ◆ イノベーションが基調になっているがインベンションも重要。技術シーズには既存のものと発明によって生まれるものがある。イノベーションと書いてしまうと基礎研究の部分が見落とされてしまう。基本的にイノベーションでは論文は書けない。研究人材とイノベーション人材とは違う。論文を増やすためにはインベンションを強化することが必要。
- ◆ ICTを広く活用するという観点から、ユーザとの連携という視点で自治体との連携は重要。介護、育児等の相談窓口をAIで補おうとする取組もあり、このような活用の方向も取り入れるべき。

社会に新たな価値を生み出すハブとなる産学連携拠点をどう形成していくのか

- ◆ 目利き力を持った産学官を連携させるコーディネータの配置や、外部の人が自由に来訪して議論できる場等、「人」と「空間」の充実は重要。

前回(第23回)における主な意見②

技術の進展・普及のスピードが加速する中で、政府の研究開発制度の設計はどうあるべきか

- ◆ 基本的に戦略の中でも技術のレベル感がある。例えば、翻訳と言っても人によってイメージに差がある。現在の技術のレベルを提示し、今後どのレベルを目指すのかを示すべき。自動運転がいい例だが、数字で技術のレベル感を示すのが良い。
- ◆ 例えばAI分野の基礎研究については、Googleの一強状態。かけている研究費のケタが違う。日本がもう一度世界に大きな成果を打ち出していくためには、世界の潮流に引きずられると永遠にキャッチアップすることになりかねないので、日本として注力すべき領域をしっかりと把握すべき。
- ◆ Beyond 5Gにおいては、電波を利用して実証する様々なプレイヤーがいる中で、省庁間連携という観点が特に今後の大きな要素になってくるのではないか。

イノベーションを生み出す源泉である「人材」について、どう優秀な人材を確保し、流動化を促進する中で、育成を図っていくのか

- ◆ 人材確保について、外国との連携もある。外国の大学を卒業した人を如何に日本に引き込むかが重要。
- ◆ 日本の現状として外国人の博士課程が増えてきている。若手というのは日本人だけでなく、グローバル人材として日本にいる優秀な外国人を如何に活用するか検討が必要。一方、知的財産の扱いには注意が必要。優秀な人材は日本を一つのキャリアステップとして次にどこかの国へ行く場合もあり、それがライバル国の場合もある。オープンイノベーションに関わる分野だが、広い意味での人材流動性やダイバーシティについて考えるべき。
- ◆ 高齢になっても意欲がある研究者等がいる。若手をサポートしつつ、これからの時代は高齢者も活用していくべき。若手を妨げない形で上手く高齢者を活用することも課題。
- ◆ 現在AIの研究者のニーズは非常に高いが、一方、今は注目されていないが今後日本の大きな柱になり得る研究分野もある。分野によって、研究人材への対応策のアプローチは異なる。